大君の御業に[[1]](#footnote-1)

小説家　香山光郎

（昭和十八年の新春に）

若き者たちよ、

弟たち、妹たち、子たちよ。

老いたる兄の、父の愛のことばを受けよ。

いときことばなれども、

そは、まことのことば、魂のこえ。

朝起くれば、

日出づるに向ひまつれ

わが皇大君のいますところ

いとうやうやしく、しまつれ、

「大君よ、この身も心もさゝげまつる」と。

いとほしき、若人たちよ、聽け、

かくすることこそ、わが生の始まり

わが生の心、わが生のすべてなれ。

この中にのみ、わが喜びあり、榮あり

かくすることこそ、これ皇民の道。

學ぶ者は學びのに、

働く者はおのがじ[し]の職場に、

農場に、工場に、店に、工事場に

急げ、いそしめ、誠もちて揃ひて

大君のに若き生命を注ぎ込めよ。

の赤き血をもちて淨められし、

アジアの大陸に、太平洋の島々に、

打建てむの

礎ぞ、柱ぞ、は。

他の土に、他のにかゝる光榮ありや。

誠あれ、若き美しき等よ等よ

誠とは君にさゝげまつるぞ、

男子は銃取りの御盾に、

女子は、強き者の妹に妻に母に、

舉りて誠たれ、弟たち、妹たち、子た[ち]

1. 『春秋』1943年2月号。特集「半島青年에 檄함」 [↑](#footnote-ref-1)